



0618 過ごしをシェアする家

石原愛美 東京藝術大学 大学院
藤井玄徳 日本大学 大学院



プレゼンサマリー

現代の家は最低限の「暮らし」に縛られ、「過ごし」の選択肢が少ない。そこでいろいろな「暮らし方」ではなく「過ごし方」をできる家を提案する。住宅密集地域の旗竿敷地に対して、大きく庭をもった塔状の単身者向け集合住宅を計画。旗竿敷地に背を向けていた周辺住宅の裏側の勝手口が新たな玄関になる。塔の住人と近隣の人たちが過ごせる大きな庭、共有キッチン、畑、池がある。塔には生活が溢れ出した共用の外部階段が巻き付き、最上階は住民の共有リビングとなる。貯水機能を備えることで近隣住宅への給水塔としての役割を担い、小さなフットプリントは災害時に避難場所を提供する。
(プレゼンテーションより抜粋)

審査員コメント

- ・旗竿敷地は環境的に不利だが、建物のあり方を変えることでその場所がむしろ魅力的に見えてくる提案はとてもよい。ただ、集合住宅ではなく、戸建てで考えた方がよかったのではないかと。(千葉学)
- ・塔に巻き付く階段部分を路地空間のように考えているが、魅力に欠ける。階段部分が充実すれば集合住宅として成り立つと思う。(松山巖)
- ・敷地全体が40坪なら実際には10～11m角くらいのところに3mの建物を建てることになる。さらに外階段をつくるということだから、とてもこの絵のようにはならない。スケール感が間違っている。(西村達志)



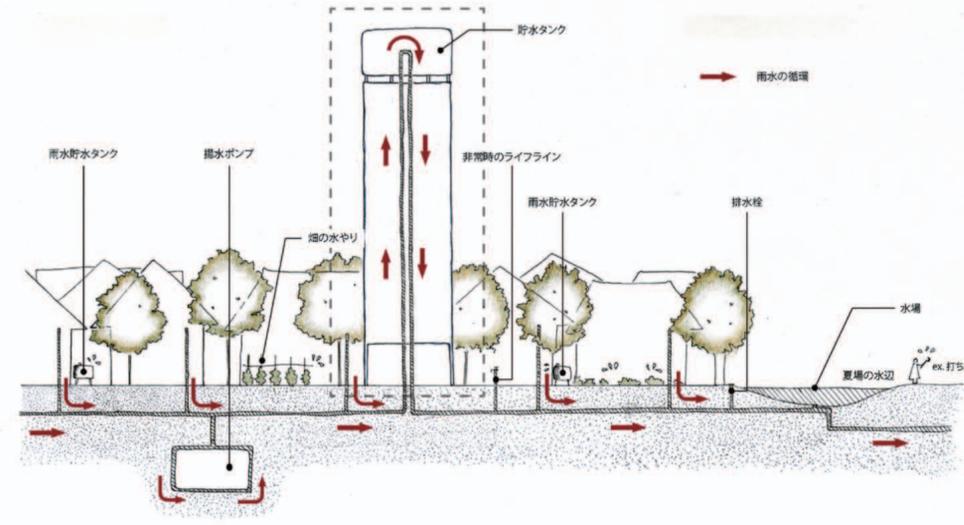
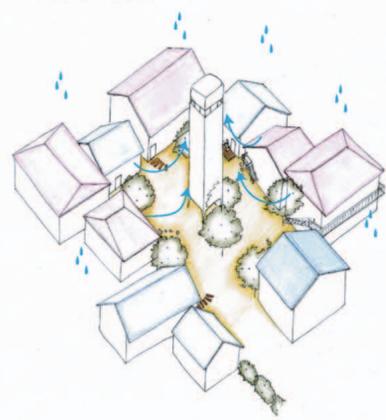
過ぎしをシェアする家

敷地は都市部の住宅密集地域に存在する旗竿敷地。閉じがちな密集地帯の住宅に囲まれた、旗竿敷地の建物が変わることで、街区の内側から住人同士の関係や、人々の住まいでの過ごし方を変えていきます。

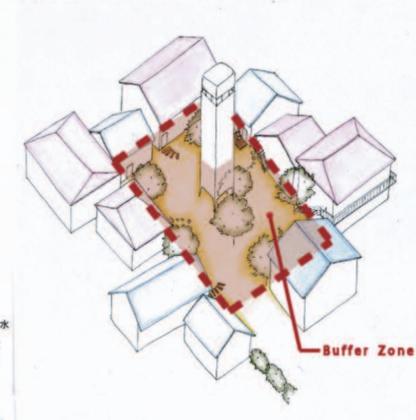
建物の構成は敷地に対して大きく庭をもったタワー型の集合住宅です。敷地を囲む隣家の人たちも過ごせるような庭と、住人が過ごせる庭としての外階段の2種類を計画しました。集まって住む建物は多くあっても、集まって過ごせる場所はあまり多くありません。閉じた家同士の関係を庭が繋いでいきます。こじんまりと暮らす人が増えてきた都市部では、いろんな暮らし方より、いろんな過ごし方ができることが、人と人の関係を豊かにすると思います。



給水塔の循環システム



火災時のバッファーとしての庭



この住宅は、多くの住宅と接する旗竿敷地の特徴を活かし貯水機能を備え、タワー型の家は給水塔としての役割を持ちます。夏の打ち水や庭の手入れに使用したり、災害時には地域ライフラインとしての利用や、消火水として利用します。さらに、一般的な住宅の敷地に対し、建物のフットプリントを大幅に小さくすることで、過ごすための庭は、木造密集地帯に災害時の防火や避難場所といったバッファーとなります。街に多く存在する旗竿敷地が住宅地につながりを生み出します。

隣人も集まる庭



外階段の庭

